

# グローバル化から見た日本語教育の アカデミック・ライティング

## Japanese Writing for Academic Purposes from the Point of View of Globalization

木戸 光子  
KIDO Mitsuko

### Abstract

In this paper, I discuss the impact of globalization on changes in the Japanese language and teaching Japanese writing for academic purposes. I demonstrate that the Japanese language is used by non-native speakers as a “temporary common language” in some situations. I also suggest that the influence of globalization has extended to teaching Japanese writing for academic purposes. On the one hand, it has led to the standardization of Japanese research papers and essays. On the other, in terms of communicative functions of Japanese language, the increase in non-native speakers writing papers and essays in Japanese has led to a diversification of Japanese writers that is, from only non-native writers to both native and non-native writers. The relation between the homogenization and diversification of language brought about by globalization is not a dichotomous one, with one or the other applying. Rather they are intricately intertwined in the Japanese language itself, context of use, etc. By considering writing for academic purposes from the point of view of globalization, this paper sheds light on what kind of composition education is necessary to preserve the Japanese written language in the future.

Key Words : Japanese education, Academic Japanese, Globalization, Temporary common language

キーワード : 日本語教育、アカデミック・ジャパニーズ、グローバル化、臨時共通語

### 1. はじめに

近年、日本ではグローバル人材育成の名の下に教育機関においてグローバル化を推進している。文部科学省ホームページを見ると、グローバル化に関する審議会や資料などが見いだされる。例えば、文部科学省(2009)「国際教育交流政策懇談会(第1回)配付資料」によると、『『グローバル化』とは、情報通信技術の進展、交通手段の発達による移動の容易化、市場の国際的な開放等により、人、物材、情報の国際的移動が活性化して、様々な分野で『国境』の意義があいまいになるとともに、各国が相互に依存し、他国や国際社会の動向を無視できなくなっている現

象ととらえることができる。」としている。つまり、グローバル化というのは、人、物材、情報が特定の国の枠組みを超えて相互に交流し依存していくことであると言える。

グローバル化の影響は、日本の教育機関において日本人学生を送り出す側だけではなく、外国人留学生を受け入れる側にも広がっている。日本語教育においてもグローバル化の影響は大きな問題であり、日本語教育の現状や課題が研究されている（嘉数 2011；牲川 2012；富谷・彭・堤編 2014；山本 2014；萬・村上 2009）。日本語教育では作文教育は会話、読解、聴解の教育に比べると、教育活動としても研究活動としてもそれほど活発ではなかった。それが近年では留学生向けの作文教科書が毎年のように出版され、文章談話研究や第二言語習得研究などで作文に関する研究も盛んになってきている。

このような状況の中で、学術活動を遂行するために必要な日本語力を養成するというアカデミック・ジャパニーズが日本語教育でも一つの研究分野として確立しつつある。アカデミック・ジャパニーズが求められるようになった背景としては、社会のグローバル化にともない、日本人学生を外国の大学に送り出す一方で、日本に留学する外国人留学生数も増加してきたことが挙げられる。平成26年5月1日現在の外国人留学生数は184,155人（前年比16,010人、9.5%増）とのことである（JASSO 2015）。グローバル化にはこのような双方向の移動が必ず発生する。グローバル化というとはまず英語教育が問題となるが、日本語教育もグローバル化の影響を受けているのである。

アカデミック・ジャパニーズの一環として、レポートや論文執筆など学術活動に必要な作文力を養成するアカデミック・ライティングが広く日本の大学で行われるようになった。独立した授業として、さらに専用の教科書も出版されるようになってきた。

本稿では、グローバル化が日本語、および日本語教育の作文教育にもたらした変化について検討する。まず、日本語使用がグローバル化によって一種の共通語として使用可能な状況になってきたこと、および日本語自体もグローバル化に適応してきたを述べる。その上で、日本語教育におけるアカデミック・ライティングが必要とされる状況が出現したのはグローバル化の影響の一つであることを指摘し、アカデミック・ライティングという高度な日本語の学習を保持する重要性を論じる。なお、本稿では日本語教育からグローバル化を考えるという観点での論考であるため、日本語を使用する非母語話者の立場を中心に言語使用を捉える。

## II. グローバル化から見た日本語の変化

### 1. グローバル化の日本語の使用への影響

日本語教育におけるアカデミック・ジャパニーズについて論ずるにあたり、議論の前提として、まず、言語使用におけるグローバル化という観点から日本語という言語の位置づけを検討する。岡戸（2002）は、言語の多様化について言語教育、特に外国語教育のあり方を問題にしており、グローバル化というのは英語の世界共通語化をグローバル化の現れと単純に捉えるような現象ではなく、複数の言語が併存した中で起こる複雑で錯綜した現象であると捉えている。岡戸

(2004)は、日本の言語教育におけるグローバル化現象を論じ、言語の併存現象について、言語の1言語化を進めるグローバル化、言語の多言語化を進めるローカル化、言語の1言語化（共通語化）と言語の多言語化（多様化）の併存する現象をグローバル化として区別している。ここで言う言語の1言語化は英語が想定されている。

確かに日本語の場合は言語使用の場としてローカル化にあたるが、しかし、使用者の多様化という面ではグローバル化している面もある。言語使用の地域性という点では、英語のようにいわば世界共通語として用いられる言語とは異なり、日本語は母語話者による使用言語として主に日本国内で地域語として用いられ、日本語自体はローカルな言語として位置づけられる。一方、日本で就労し、あるいは勉強する外国人が日常生活やビジネスや勉学の場面で日本語を使用する場面がある。英語のような広域で使用される言語ではないが、日本語を母語としない者が日本語を媒介として仕事で交渉などのビジネス活動を行う、あるいは大学で学術活動を行うという点で、特定の専門性を要求される日本語の使用が行われる。

例えば、学術活動の場合、日本の大学に留学する外国人留学生は、研究活動において使用される言語として英語の他に日本語も媒介言語となることがある。英語で研究活動をすると言われる理系分野でも、論文や発表は英語だが、研究室でのディスカッションは英語と日本語を併用しているところもある。日本国内の学会では理系でも文系でも日本語で発表している光景は普通に見られる。また、文系の学会で、日本以外の外国で行われる発表の媒介言語として英語の他に日本語でも可とする場合もある。特に、日本語教育や日本文学のような人文分野の日本研究の学会でそのような例が見られる。

つまり、言語におけるグローバル化とは1言語が共通語化するものであるといっても、常に同じ言語が共通語になるわけではなく、特定の場面によっては、ある言語が一時的に共通語となる場合もある。この場合は母語以外の話者が特定の目的で行う言語活動によって、ある言語を一時的に共通の媒介言語として使用することを意味する。本稿ではこのように使用される共通語を「臨時共通語」と呼ぶことにする。英語のように地域性や使用の場面性を超えて共通語として使用される言語に対して、いわば「臨時共通語」として使用されるのである。これは地域性より場面性が強い使用形態だと考えられる。

地域を越えて言語が使用されることは、現在の英語のようにグローバル化しつつある言語以外にもある。現代ではインターネットを介した地域を越えた伝達手段もある。外国にいてもメールやLINE、Skypeなどを日常的に使用できる。さらには、インターネットを用いて複数の参加者による会議もできる。このようなコミュニケーション場面での言語使用は日常的に見られる。例えば、日本の大学でも大学院入学試験の面接や学位論文の審査の場面において、インターネット回線を通して、外国にいる日本語非母語話者の教員や学生が日本にいる母語話者の教員や学生との間で、同時進行で話すことができる。

## 2. グローバル化の日本語自体への影響

言語のグローバル化は日本語自体の言語変化にも影響を与えてきた。言語接触という点から考

えれば、日本語自体に対するグローバル化の影響はごく最近のことではなく、古くは漢字や漢語の移入、明治時代以降は欧米の文化を積極的に移入する中で和製漢語やカタカナ語の移入という形で見られる。このような現象について、陣内（2007）は「中間言語文化」の一例として日本語の外来語の変化を図示している。以下、引用して図1に示す。

外来語は日本語という言語が欧米語を目標言語として単語レベルで無数に作り出されたもので、言語習得研究における「中間言語」のようなものであり、文明・文化の乗り換えと言語の乗り換えが起こっているという。つまり、これは日本語という言語自体が他の言語との接触を通して、グローバル化に適応する現象だと言える。日本語がグローバル化に対応するにあたって必要な言語変化を起こした現象と考えられる。この言語変化は今までの日本語の体系に新しい概念を取り入れやすくするために行われたという点で日本語自体の質的な変化である。

ただし、このグローバル化への適応現象は、日本語が世界共通語として非母語話者に使用されるのではなくて主な言語使用者は日本語母語話者であり、他の言語と併存しながらも他の言語の一部を日本語に取り入れて日本語の使用域を拡大することを意味する。また、このような言語変化の段階では、体系の異なる新たな言語を創出する融合にまでは至っておらず、日本語の基本的な言語体系は保持されていると考える。

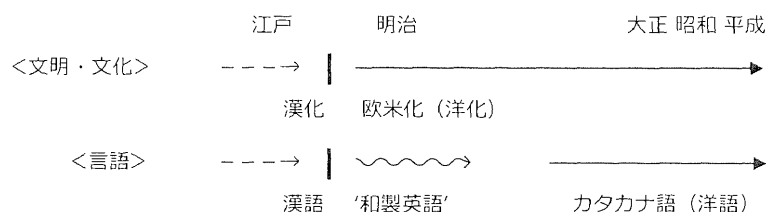


図1 <文明・文化>乗り換え過渡期としての「和製漢語」(陣内2007: 9より転載)

### 3. グローバル化が日本語にもたらす変化

以上、グローバル化という現象を通して複数の言語の併存現象について述べ、グローバル化は英語の1言語化だけを意味するのではなく、場面によっては日本語も「臨時共通語」として共通語化することを指摘した。これは、日本語とそれ以外の言語との関係によって日本語の位置づけが変わるという日本語と他言語との関係性の変化である。次に、日本語自体の変化に焦点を当てて外来語の造語を容易にする「中間言語文化」について述べ、グローバル化にともなう他言語からの影響によって日本語の語彙が変化することを示した。これは、他言語との接触によって日本語自体をグローバル化に適応させる変化である。

以上述べたように、言語におけるグローバル化の影響は、英語の世界共通語化や日本語の地域語化の強化といった単純なものではなく、多言語間の関係性や言語自体の変化にも及ぶ。日本語がこのような多面的な存在として捉えられることこそ、グローバル化がもたらした影響であると言える。

### III. グローバル化の日本語アカデミック・ライティングへの影響

#### 1. 日本語教育におけるアカデミック・ライティングの成立

##### (1) 日本の大学におけるアカデミック・ライティングの拡大

グローバル化の影響は留学生を受け入れる日本の大学の日本語教育にも及んでいる。日本語教育においてアカデミック・ライティングが成立するのは非母語話者である留学生が日本語で学術活動をする機会が多くなったことによる。留学生数が少なかった時代は大学では一般的な日本語学習を行い、初級、中級、上級というレベル別の教育を行ってきた。ごく少数の留学生が日本語で論文やレポートを書いたり学会発表を行ったりしていた。ほとんどの日本語学習者はアカデミック・ライティングを必要としていなかった。もし必要だとしても、研究室で指導教員や先輩に教わりながら個別指導の形で行われることがほとんどだったと推察される。

しかし、日本の大学で学部生や大学院生として学ぶ外国人学生数が増えるにしたがい、個別指導では対応困難な状況が起り、アカデミック・ライティングを日本語教育の中で授業として行う必要性が出てきた。日本語教育において、かつてはレポートや論文を作成する言語技術に特化した授業は少なかった。日本語力全般を高めるための補習として、学部留学生対象の日本語日本事情科目、および、研究生対象の日本語補講の中で開講される程度であった。それが、現在では、留学生の日本語コースにおいて、ごく普通に開講されるようになった。大学院生を対象とする言語文化科目としての上級作文、大学院入学前の研究生を対象とする日本語補講の上級作文、学部生を対象とする日本語作文、というように対象や目的に応じて、論文作成、あるいはレポート作成のための言語技術を習得する授業が開講されている。

##### (2) アカデミック・ライティングにおける一般日本語教育から専門日本語教育への深化

日本の大学における留学生増により、単なる量的な拡大への対応のみならず、質的にも多様な留学目的を持つ留学生への対応を日本語教育が担うこととなった。様々な留学目的を持つ留学生のニーズに応じて、一般的な日本語教育だけではなく、学術的な専門性などに目的を特化した日本語教育も含めて作文教育が多様化かつ深化していく流れが見られる。日本語教育学会とは別に、専門日本語教育学会やアカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会のような学会・研究会が設立され、学術活動を目的としたアカデミック・ライティングに関する発表や論文が常時公開されるようになった。例えば、村岡 (2014) は、佐野 (2009) の言う英語のEAP (English for Academic Purposes) の日本語版であるJAP (Japanese for Academic Purposes) に該当するものとして、大学院生対象の「専門日本語教育」としてのライティング教育を提唱している。これは学習者の特定のニーズがあり、学習者が明確な目的を持っていることを前提として「固有の現場」に特化した教育であると述べている。

本稿で言うアカデミック・ライティングは、大学生・大学院生が学術活動の中で必要な作文を作成する技術を意味しており、「専門日本語教育」を含むものの、より広い意味で学術活動を支える作文の作成技術を学ぶ作文教育を指す。したがって、ここでの「作文」に該当するのは主に

レポートと論文である。

アカデミック・ライティングの必要性に応じて、作文教科書も専門性を意識したものが出版されるようになった。留学生対象の作文教科書も一般的な作文教科書が中心であったのが、表1に示すように、論文やレポート作成を目的とした教科書が出版されるようになった。

日本語を媒介言語として学術活動をする留学生を視野に入れたこれらの教科書の中で、論文作成を意識したものは、③⑤⑨⑩である。以上の教科書の変遷を見ると、レポート作成や論文作成、学部留学生対象や大学院生対象など学習者の属性や目的に応じて教科書が出版されていることがわかる。

これらの教科書では、留学生のみを対象とする教科書だけではなく、留学生と日本人学生の双方を対象とする教科書が見られる。③⑥⑨⑩⑫は留学生と日本人学生双方の使用を想定している。母語・非母語話者ともに日本語でレポートや論文を書くための知識や言語技術、論理的思考力が要求され、それらは双方に共有できるものである。これは日本語を母語とする・しないにかかわらず、日本語を共通の媒介言語として学術活動を行うことができるということを意味する。先に「臨時共通語」としての日本語の使用を指摘したが、学術活動の場で使用できる前提として、母語話者だけではなく非母語話者もすでに学術活動を日本語で行うことができることが前提となっている。母語話者、さらには一部の非母語話者が日本語を使用して学術活動が日常的にできる状況が出現し、かつ保持されていて初めて日本語での学術活動が可能となるのである。

表1 日本で出版された日本語教育におけるレポート・論文作成を目的とする作文教科書

出版年代	出版順	書名・出版年・著者名・出版社名	文章ジャンル		所属		対象者	
			論文	レポート	学部	大学院	留学生	日本人学生
1980年代	①	『実践にほんごの作文』 1986年、佐藤政光・加納千恵子・田辺和子・西村よしみ、凡人社		○	○			○
	②	『研究発表の方法—留学生のためのレポート作成・口頭発表の準備の手引き』 1996年、高山弥生・沖田弓子、産能短期大学		○	○	○	○	
	③	『大学生と留学生のための論文ワークブック』 1997年、浜田麻里・平尾傳子・由井紀久子、くろしお出版		○	○	○	○	○
2000年代	④	『留学生のための論理的な文章の書き方』 2000年（改訂版2003年発行）		○	○			○
	⑤	『大学・大学院留学生の日本語④論文作成編』 2002年、アカデミック・ジャパニース研究会・アルク（2015年改訂版発行）		○	○	○	○	
	⑥	『ピアで学ぶ大学生の日本語表現・プロセス重視のレポート作成』 2005年、大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂、ひつじ書房（2014年第2版発行）		○	○		○	○
	⑦	『小論文への12のステップ』 2008年、友松悦子、スリーエーネットワーク		○	○		○	
	⑧	『留学生のためのここが大切 文章表現のルール』 2009年、石黒圭・筒井千絵、スリーエーネットワーク		○	○		○	
	⑨	『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』 2009年、二道徳子・佐藤勢紀子・因京子・山本富美子・大島弥生、東京大学出版会		○	○	○	○	○
	⑩	『論文作成のための文章力向上プログラム-アカデミック・ライティングの核心をつかむ』 2013年、村岡真子・因京子・仁科喜久子、大阪大学出版会		○		○	○	○
2010年代	⑪	『アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ演習』 2014年、鎌田美千子・仁科浩美、スリーエーネットワーク		○	○	○	○	
	⑫	『Good Writingへのパスポート-読み手と構成を意識した日本語ライティング』 2014年、田中真理・阿部新、くろしお出版		○	○	○	○	○

※表の○は該当する項目を示す。◎は論文作成を意識したことが伺われるものを示す。

なお、外国人留学生対象の作文教科書では構成や文型・語彙の表現が具体例をともなって提示されているが、日本人学生に対しても文章作法の心構えの説明以上に、より具体的な表現の形をともなった作文教科書が必要になってきている。近年、日本人大学生に対しても日本語のレポートや論文作成のための授業が開講されるようになった。日本人大学生の学力低下への対応からリメディアル教育も広がっている。つまり、日本語母語話者に対しても非母語話者相当の学術活動を目的とする日本語学習が求められているのである。

以上のような状況から、日本語教育の作文教育において、学術活動を目的とする言語技術の養成を目指すアカデミック・ライティングが確立してきたと言える。

## 2. グローバル化による言語の均質化の日本語への影響

### (1) レポート・論文への影響

アカデミック・ライティングの対象となるレポート・論文ではグローバル化によって文章の構成や表現の均質化が起こる傾向がある。つまり、表現自体は各言語で異なっても、表現技術や論理展開は言語間で共有しようとしていると考えられる学術的文章であるレポートや論文の構成や表現では、特に理系の文章に英語の文章の影響が強いと言われる。これは英語のグローバル化による学術的文章の変容であり、以前より木下（1981）のような理系研究者によって奨励されてきた重点先行型の科学論文につながっている。

このようなレポート・論文作成における表現形式の共有による言語の均質化が進みすぎると、一方の言語のみが優位性を持つことによる弊害も起こるのではないだろうか。渡辺（2004）は日米の子供たちの作文構成の違いが言語能力の評価に及ぶことの例として、思考様式の文化差を理解していない教師が語学力に問題のある外国人の子供に対して学習障害ではないかと疑ったという事例を紹介している。したがって、グローバル化による言語への影響は言語使用者の言語能力だけではなく、学習能力に対する評価も左右する恐れがあることに注意しなければならない。

### (2) 書き言葉への影響

グローバル化における日本語の均質性の問題について、ここまではアカデミック・ライティングを中心に考えてきたが、日本語の書き言葉に対象を広げて検討しておく。作文教育では書き言葉を学習対象とするので、アカデミック・ライティングで取り上げるレポートや論文の他に、書き言葉としての日本語のあり方も考慮しておく必要がある。

文学について、小説家の中には言語の均質化に関して、表現の多様性がなくなることを指摘する意見が見られる。水村（2008）は普遍語と現地語という対比において、書き言葉に上下がある状態を危惧し、グローバル化が進んで英語を中心とした特定の言語のみ書き言葉が必要とされる状況を憂慮している。叡智という言葉を用いて、文学のみならず学術的な活動も含めて現地語では成立しない状況が訪れるのではないかと指摘している。

実は、これは文学に限った問題ではない。普遍語と現地語による書き言葉の上下関係の存在は、人文科学、社会科学、自然科学のあらゆる教養が普遍語、すなわち英語でのみ行われて、他

の各言語は特定の地域でのみ話される日常会話に特化されて文化や技術などを過去から現在へ、さらに未来へ伝える言語として使用されないことを意味する。高等教育が普遍語のみで行われると、次第に初等教育や中等教育も普遍語で行うことが主流となり、現地語では行われなくなる状況が進むことが予想される。

### (3) 言語教育への影響

教育における問題として、言語学習の目標を統一基準としてどの言語にも当てはめた結果、各言語の個別性を考慮しなくなる弊害も考えられる。日本語教育の場合、日本語教育に共通する教育基準を作る動きがあり、作文教育もその中に含まれている。例えば、国際交流基金が提唱する「JF日本語教育スタンダード」は、JF日本語教育スタンダードのホームページによると、ヨーロッパの言語教育の基盤として作られたヨーロッパ言語共通参照枠CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment) の考え方を基礎にして立てられた日本語の熟達度を示す基準であるという。これに基づいて日本語教育のコースデザインや授業実践を行う教育機関もある。言語によるコミュニケーションを言語能力と言語活動の関係で捉え、習熟度ごとに書く活動に関する目標が何ができるかというCan-doとして記述されている。この基準の作文に関する項目を見ると、作文で必ず問題となる日本語の表記や語彙のことがほとんど書く活動のCan-doの記述に含まれていない。作文教育では手書きにせよワープロ使用にせよ、漢字語彙やカタカナ語など語彙の習得や日本語の表記に対して問題のある学習者がいる。多言語間に共通の基準を立てることは、多言語の多様性を尊重しているように見える一方で、同一基準を異なる言語に当てはめて各言語の持つ多様性が考慮されていない。さらに、学習者の母語による習得難易度の相違という教育基準には重要な視点が含まれない恐れがある。

### (4) 言語の均質化の問題点

グローバル化がもたらす言語の均質化の問題について、西江(2000)はグローバル化が進みすぎた世界では各言語の均質化が起こり、その言語特有の存在感が薄れた結果、思考様式の多様性をなくしていく危険性もあるのではないかと指摘している。「地球語」の存在を指摘し、地球上の人々が同じ話題を共有し、その話題に関する話の筋道の立て方、そこで表現しようとする価値観などの面で共通性を持つ傾向が強くなると述べている。以下、西江の言語のグローバル化とローカル化について指摘を表2にまとめる。

現代社会において、英語使用が日常生活から学術活動や文化の享受まで広がる様相は、英語が「地球語」として社会に存在していることを意味すると言える。言語において、グローバル化は言語の均質化をもたらし、ローカル化は言語の多様化をもたらすという相反の方向性にあると考えられる。しかし、学術活動や文化の享受、さらにはビジネス場面のような仕事の媒介言語として英語という1言語のみが世界中で使用され、それ以外の言語が使用されなくなる状況となるのは問題ではなからうか。グローバル化が英語以外の言語での活動範囲を制限し、英語以外の言語は思考や教養などを論じる言語でなくなるような未来も考えられる。



表2 言語のグローバル化とローカル化（西江 2000 : 61-64による）

グローバル化「地球化 (globalization)」	ローカル化「地域化 (localization)」
<ul style="list-style-type: none"> <li>・数多く存在する世界とは異なって、誰にとっても地球というものは1つである。</li> <li>・「地球語」地球上のどの土地でも、その誰かによって話され、書かれ、読まれており、また、世界中どこに行っても、地球語を母語とする一部のものを除いては、自分の言語とその言語を併用して生活している人々が見出されるといった状態である言語</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・漠然としていて輪郭がない空間の中で、人々によって同じ言語が話されているとされる場所を具体的に示し、特定化すること</li> <li>・ある地域が次第に細分化されていく状態</li> <li>・ある言語の使用地域が次第に拡大していくに従い、地域による多様性が生じるという状態</li> </ul>

先に挙げた水村や西江の指摘は、書き言葉を用いる作文教育において重大な問題を提起している。書き言葉を必要とされない状況、さらには学術活動や文化活動が特定の言語、すなわち現代社会では英語でしか行われない状況では、叡智を求める前提として英語が使えなければならないことになる。つまり、かつてのヨーロッパにおけるラテン語学習のように、全人類が叡智を求めるために英語を学ぶしかない状況が出現することを意味する。とすると、アカデミック・ライティングのグローバル化への適応は英語以外の他言語、さらには多言語でも行われたほうが人間として叡智を求める上では、多様で豊かな世界を築き、かつ享受できるのではないか。

#### IV. まとめ

グローバル化がもたらす言語の均質化と多様化は一方が成立すれば他方が成立しないという二項対立の関係ではなく、日本語自体や日本語の使用場面など複数の観点において錯綜している。グローバル化による日本語の変化については、グローバル化という1言語化と多言語化の併存現象において「臨時共通語」として日本語が使われる状況があることを述べた。「臨時共通語」とは、ある言語が一時的に共通語となる場合で、母語以外の話者が特定の目的で行う言語活動によって、ある言語を一時的に共通の媒介言語として使用することを意味する。

アカデミック・ライティングは大学では主にレポート・論文を作成する言語技術を学ぶことを意味する。したがって、レポート・論文に必要とされる構成や論理的思考力はどの言語にも共通の要素が含まれることから、どの言語で書いても類似した構成や文脈になる傾向となり、自ずと均質性の高いものになるだろう。つまり、言語が異なっても同じ構成や論理展開で文章が作成されるということである。学術活動が世界共通である以上、均質化の傾向があるのはグローバル化の宿命とも言える。

しかし、それでも多言語でアカデミック・ライティングが成立する世界では、学術活動のような専門性の高い活動が多言語で行われることによる利点もあるはずである。母語話者であれ非母語話者であれ、多言語による思考様式の多様性を尊重することも重要であると考えられる。西江(2000)は、同じ出来事を違う言語で同時に知ることの例を挙げ、表現内容の均質化がもたらす表現形式の多様性の消失を危惧し、内容の均質化と形式の多様性がなくなった先には思考様式の多様性も失われるのではないかと警告している。

アカデミック・ライティングが成立するのは「臨時共通語」になり得る高度な日本語を学習することの必要性が保持されるかにかかっている。その保持には、アカデミック・ライティングとしての日本語を作文教育で行うことができるか、非母語話者に拡大して使用できるかが重要になると考える。日本語の保持というのは、個人が多言語の運用能力を備えることを否定するものではない。問題は、いくら多言語の運用能力を身につけても、特定の普遍語、すなわち現代では英語でしか教養を身につけたり科学技術を論じたりすることができず、英語以外の言語では叡智を得ることも論ずることもできなくなることである。多言語で行える言語活動が限られたものになるというのが問題なのである。書き言葉としての日本語の保持は、日常生活のみならず、文化や科学技術などの学術活動を日本語で行える状況が続くことが前提となる。

#### 参考文献

- 岡戸浩子 2002『「グローバル化」時代の言語教育』くろしお出版。  
——— 2004『言語のグローバル化について説明してください。』河原俊昭・山本忠行編『多言語社会がやってきたー世界の言語政策Q&A』くろしお出版、100-101頁。
- 嘉数勝美 2011『グローバルバージョンと日本語教育政策ーアイデンティティとユニバーサリティの相克から公共性への収斂』ココ出版。
- 木下是雄 1981『理科系の作文技術』（中公新書）中央公論新社。
- 金水敏 2004『グローバル時代における日本語ー“客観化”をめぐるー』『日語日文学研究』49輯、韓国日語日文学会編、15-30頁。
- 国際交流基金「JF日本語教育スタンダード」ホームページ<http://jfstandard.jp/top/ja/render.do>（参照日2015年9月25日）。
- 佐野ひろみ 2009『目的別日本語教育再考』『専門日本語教育研究』11号、専門日本語教育学会、9-14頁。
- 陣内正敬 2007『外来語の社会言語学ー日本語のグローバルな考え方』世界思想社。
- 牲川波都季 2012『戦後日本語教育学とナショナリズム』くろしお出版。
- 富谷玲子・彭国躍・堤正典編 2014『グローバルズムに伴う社会変容と言語政策』ひつじ書房。
- 西江雅之 2000『抗争から併存へ』荒このみ・谷川道子編『境界の「言語」地球化／地域化のダイナミクス』新曜社、61-83頁。
- 日本学生支援機構（JASSO）2015『平成26年度 外国人留学生在籍状況調査結果』  
[http://www.jasso.go.jp/statistics/intl\\_student/documents/data14.pdf](http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/data14.pdf)（参照日2015年9月19日）。
- 水村美苗 2008『日本語が減びるとき』筑摩書房。
- 村岡貴子 2014『専門日本語ライティング教育』大阪大学出版会。
- 文部科学省 2009『国際教育交流政策懇談会（第1回）配付資料』資料3「グローバル化と教育に関して議論していただきたい論点例」文部科学省ホームページ  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/kokusai/004/gijiroku/1247190.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/004/gijiroku/1247190.htm)（参照日2016年1月17日）。
- 山本湧里 2014『戦後の国家と日本語教育』くろしお出版。
- 萬美保・村上史展 2009『グローバル化社会の日本語教育と日本文化ー日本語教育スタンダードと多文化

共生リテラシー』ひつじ書房。

渡辺雅子 2004『納得の構造－日米初等教育に見る思考表現のスタイル』東洋館出版社。